

一次の《文章Ⅰ》は、動物言語学者・鈴木俊貴の『僕には鳥の言葉がわかる』の一節です。これを読んで後の問いに答えなさい。

《文章Ⅰ》

シジュウカラは文を作って会話する。僕の中では常識だった。しかし、それを証明するには本当にたくさんの実験が必要だった。

初めて気づいたのは修士課程一年の夏。軽井沢の森でシジュウカラの子育てについて研究していた時のことだ。ヒナの数をかぞえようと、ある巣箱に近づくと、背後から激しい鳴き声が聞こえてきた。

「ピーツピ、ピーツピ、ピーツピ・ヂヂヂヂ！」

親鳥が僕に威嚇しているとすぐにわかった。大きな動物が自分たちの巣箱の前で何か怪しい動きをしているのだから、当然の行動だ。ヒナたちを守るため、僕を追い払うべきである。「ヒナの数をかぞえるだけだから……」と言いたい、そんな思いはシジュウカラに通じるはずもなく、僕は急ぎ足で巣箱を離れた。」「a」「追い払われたわけである。

離れてからも「ピーツピ・ヂヂヂヂ、ピーツピ・ヂヂヂヂ……」と警戒の声はしばらく続いた。その様子を観察していて、僕は「ハッ！」と気がついたのだ。この親鳥、二つの単語を組み合わせている！

それまでの観察から、シジュウカラの出す鳴き声のうち、いくつかについては、その意味がある程度わかっていた。

「ピーツピ」と聞こえる声は、仲間に注意を促す声。ハシブトガラスやオオタカなど、天敵になりうる動物を見つけた時に、「ピーツピ！」と鋭く発する。巢に近づいた人間やネコに対してもそう鳴くことがある。この声を聞くと、周りのシジュウカラは、どこに危険が迫っているのか確認すべく、左右に首をキョロキョロと動かす。無理やり人間の言葉にすると「警戒しろ」といったところだ。

一方、「ヂヂヂヂ」と聞こえる声は「集まれ」という意味だ。たとえば、群れの仲間を餌場に呼ぶ時、よくこの声を出す。また、群れの仲間やつがい相手とはぐれてしまったシジュウカラも、この声を繰り返し発する。実験的に、「ヂヂヂヂ」をスピーカーから流してみると、それを聞いたシジュウカラはすぐ音源に寄ってくる。

そういうわけで、「ピーツピ・ヂヂヂヂ」は「警戒して・集まれ」という意味だと「b」「理解できたのである。二つの単語が連なった“二語文”といったところだ。

（中略）筆者は「シジュウカラが文を作る」ことに気付く、実験をくり返すことで確信を深め、それを論文にまとめた。その論文は一流の総合科学誌「ネイチャー・コミュニケーションズ」に掲載され、反響を呼んだ。

シジュウカラが鳴き声を組み合わせて文を作るという発見は、それまでの動物のコミュニケーション研究に、〈 〉を投じる成果となり、世界中の動物学者に衝撃を与えるものだった。そして、その論文が公開されると、野生動物の持つ言語能力について、いくつかの研究グループが調べ始めた。チンパ

ンジー、ボノボ、オナガザル類。時間はかかるかもしれないが、いずれこれらの動物でも文法能力が見つかるかもしれないと、僕は期待に胸をふくらませていた。

その一方で、言葉を持つのは人間だけだと信じてきた言語学者たちにとっては、シジュウカラが文を作れるという研究結果は、簡単に受け入れられるものではないようだった。なにしろ、単語を組み合わせる能力こそが、人間に固有であり、様々な言語表現を生み出す原動力だという学説が広く普及していたからだ。

言語学者からシジュウカラ語に関する意見論文もいくつか出たが、そのほとんどは、ヒトの言語とシジュウカラ語の違いに関するものであった。たとえば、「人間の言語の場合、三語以上も組み合わせるが、シジュウカラは二語しかできないから言語ではない」という意見である。「そんなことを言ったら、二語文は言語ではないことになってしまっているではないか！」とも思ったが、「僕はまだシジュウカラの三語文を調べていないので、これについては現段階ではわからない。また、もし三語以上を組み合わせることができなかったとしても、シジュウカラにとってはそれで十分だから二語止まりなのであろう」と説明した。

そもそも、僕はシジュウカラが「」とは言うていないし、そうは思っていないのだ。ただ、シジュウカラの鳴き声のすべてが感情の表れではない。かれらにも、鳴き声に意味を含めたり、それを組み合わせる文を作る力がある」と主張しているのである。人間と鳥では、言葉や品詞、文法のルールに違いがあつて当然だというのが、僕の考えだった。

意見論文には返答を書くのがマナーであり、僕もそうにしていたが、そのほとんどは再度、研究内容を説明するだけで十分であり、結論を変えるものは一つもなかった。そして僕が感じたことは、こういった意見の数々はやはり人間が最も高度であり、動物は単純であるという「^注妄信に基づいている」ということだ。人間も動物の一つであり、人間の言語も動物の言語の一つにすぎないのだが、まだこれに気づいていない人が本当にたくさんいるのである。

そんなある日、一つだけ「たしかに、それは検討しないと」思える意見があった。

それは、そもそもシジュウカラは「ピーツピ・ヂヂヂヂ」の音列を“文”として認識しているわけではなく、“単に時間的に連続している二つの鳴き声”として認識しているのではないかというものだ。

もっと噛み砕いて言うと、シジュウカラは、「ピーツピ」と「ヂヂヂヂ」がその順番で連続して聞こえてきたら、それが文としてまとまっているのと同じで、天敵を追い払うかもしれないではないかという指摘である。

――なるほど。ひょっとしたらそうかもしれない。「ピーツピ（警戒しろ）」と聞こえてきたら、警戒状態になり、その直後に「ヂヂヂヂ（集まれ）」と聞こえてきたら、警戒しながら集まる。もしそうであれば、たしかに文とはいえないだろう。

ここで大事になるのが、そもそも“文”とは何かということだ。文とは、も

ちろん、ある話者が二つ以上の単語を組み合わせた表現のことである。話者は文法のルールに従って、単語を一つのまとまりに組み合わせ、一つのセリフを発話する。いくら単語が連続して聞こえてきても、異なる話者から別々のセリフとして発話されたら、それは文とはいえないはずだ。つまり、大切なのは、ある話者が組み合わせていると聞き手が理解しているかどうかである！

わかりやすくするために、ネコ型ロボットのセリフを例に説明すると、こんな感じだ。

「ぼく・ドラえもん」。この二語の連なりを文として認識する上で、僕たちは無意識的にそれら二つの音声が時間的に連続していて、文法ルールに則^{のっと}て発せられていること、そしてそれらが同一の音源から（つまり同じ口から）発せられていることを瞬^{しゅん}時に認識している。

そして、一人の話者から「ぼく・ドラえもん」と発せられた場合、話者は自分がドラえもんだと言っていることになる。

一方、もし、Aさんが「ぼく」、Bさんが「ドラえもん」というように別々に話した場合、Aさんは「⁵」について何かを伝えようとしている状況で、Bさんは「⁶」について何かをしゃべっているという状況になり、どちらの話者も「自分はドラえもんである」とは言っていないことになる。つまり、文としては認識されず、意味も合成されないのだ。

察しのいい読者であればもうお気づきかもしれない。そうである。「ぼく・ドラえもん」と「ぼく」、「ドラえもん」をシジュウカラに聞かせてみればよいのである！

つまり、「ピーツピ・ヂヂヂヂ」の音列を一つのスピーカーから聞かせる場合と、「ピーツピ」、「ヂヂヂヂ」と、二つのスピーカーから別々に聞かせる場合で、それらを聞いたシジュウカラ^カの行動を比較^{ひかく}するというアイデアだ。

もし、シジュウカラが単に「ピーツピ」と「ヂヂヂヂ」の連続を聞くだけで⁷捕食者を追い払う行動にでるのであれば、それらを二つのスピーカーから別々に流しても、二つの声が連続して聞こえる限りは同様^キの反応が見られるはずである。

一方、僕の予想通り、シジュウカラが「ピーツピ・ヂヂヂヂ」を「警戒して・集まれ」という一つのかたまり（文）として認識しているならば、その音列が一つのスピーカーから流れた時にのみ、つまり、一羽のシジュウカラが組み合わせているような状況においてのみ、捕食者を追い払いに集まるはずだ。

実験デザインが思いついたら、あとは実行するだけだ。僕はスピーカーと天敵のモズのはく製を持ち、いつもの軽井沢の森へと向かった。

まず試^{ため}した^クのは、一つのスピーカーから「ピーツピ・ヂヂヂヂ」と組み合わせる声。自然な頻度^{ひんど}で九十秒間再生し、シジュウカラたちの行動変化をビデオで記録する。観察者は二名で、見逃^{みのが}しのないように心がけた。

シジュウカラの群れを見つけたら、なるべく素早^{すばや}くその近く^ケの木の枝にスピーカーをセット。そして、スピーカーから五メートル離れた木の枝にモズのはく製も設置した。

さっそく鳴き声を流してみる。「ピーツピ・ヂヂヂヂ」と繰り返し流すと、シジュウカラたちは、警戒心を高めた状態でモズのはく製へと近づいてきた。

そして、翼^{よく}をすばやく上げ下げし、モズのはく製を追い払おうと威嚇^{いかく}しただのだ！ もちろん、はく製なので追い払うことはできないのだが、それでもたくさんのシジュウカラがモズの周りを枝から枝へと飛び移り、必死である。

次に試したのはスピーカーを二つにする実験だ。シジュウカラの群れを見つけたら、スピーカーを十メートル離して二個セット。そして、その中間地点にモズのはく製を設置した。

一方のスピーカーからは「ピーツピ」、他方からは「ヂヂヂヂ」と別々の声流れるが、そのタイミングは連続していて、前の実験と同じになる条件とした。

すると、シジュウカラの反応は、スピーカー一つの実験とは、明確に違うものだった。「ピーツピ」と「ヂヂヂヂ」を別々のスピーカーから流してみると、モズを翼で威嚇するものもいなければ、接近するものもいなかったのだ。モズのはく製があるにもかかわらず、みなその場で餌を探したりして追い払う気配はまったくない。正直、ちよつとくらいモズを追い払いくるシジュウカラもいるのではないかと思っていたが、そんな鳥は一羽もいなかったのだ。シジュウカラは、一つの音源、つまり一羽の話者が「ピーツピ」と「ヂヂヂヂ」を組み合わせている時にだけ、モズを追い払うに行くのである。

語順を逆にした「ヂヂヂヂ・ピーツピ」も試してみた。すると、一つのスピーカーから流しても、二つのスピーカーから「ヂヂヂヂ」、「ピーツピ」と分けて流した場合も、モズのはく製を追い払いくるジュウカラはいなかった。

僕はこれらの実験を繰り返し続けた。六十四の異なる群れを対象に実験をおこなったが、傾向^{けいこう}は驚^{おどろ}くほどに一貫^{いっかん}していた。

やはり思った通りである！ シジュウカラは「ピーツピ・ヂヂヂヂ」を一つの文と認識しているのである。二羽のシジュウカラが「ピーツピ」、「ヂヂヂヂ」と別々に鳴いた場合、それらがいくら連続していたとしても、二つの単語の合成は起こらない。

僕は大学に戻るときさっそくこの研究成果を論文にまとめ、ネイチャー・コミュニケーションズ誌^じに投稿^{とうこう}した。がんばった甲斐^{かい}もあり、論文は見事掲載^{けいざい}に至った。

この論文を受けて、僕に意見論文を書いた例の言語学者の新しい論文にはこう記されていた。

「シジュウカラは文を作る。異なる意味を持つ二つの鳴き声を組み合わせるし、そこには文法のルールもある。聞き手のシジュウカラは、その組み合わせた音列を、ある個体が発話した一つの「文」として認識しており、単に連続した別々の二語として認識しているわけではない。他の動物においても、シジュウカラの研究のようにきちんと検証するべきである」

ようやく、動物学者と言語学者が合意し、「動物言語の解明」に向かつて歩み出した気がした。

【注】妄信……むやみに信じ込むこと。

問一 1 大きな動物が自分たちの巣箱の前で何か怪しい動きをしているとありますが、これは何がどのようなことをしているのですか。本文の内容を、まえて解答らんに合うように説明しなさい。

問二 「 a 」 「 b 」にもっともよくあてはまるものをそれぞれア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- a…アまんまと

イもたもと

ウそくさと

エさりと
- b…アめきめきと

イやんわりと

ウすなりと

エじわりと

問三 2 この声 3 この声 とありますが、それぞれ、どのような意味のどのような鳴き声ですか。本文中の語句を用いて答えなさい。

問四 4 へ を投じる のへ へ に入る言葉を、漢字二字で考えて答えなさい。

問五 に入れるのにもっともふさわしいものをア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア人間と同じ言語をしゃべっている

イ人間よりも単純な言語をしゃべっている

ウ人間とは違う言語をしゃべっている

エ人間よりも複雑な言語をしゃべっている

問六 5 「」について何かを伝えようとしている 6 「」について何かをしゃべっているの 「」に入る語を本文中の語をぬき出して答えなさい。

問七 本文中の の について、はたらきが違うものをカ～ケから一つ選び記号で答えなさい。

カ シジウカラの行動 キ 同様の反応が ク まず試したのは ケ 近くの木の枝に

問八 7 捕食者 とありますが、この実験では具体的に何のことを指していますか。本文中の語を用いて十字程度でぬき出して答えなさい。

問九 筆者が行った実験を次の図表にまとめました。図表の中の (①) (②) (③) (④) に入る言葉を考えて答えなさい。

実 験		結 果	わ かる こと
①	一つのスピーカーから「ピーツピ・チチチ」と組み合わせて鳴き声を聞かせる。	たくさんのシジウカラがモズのはく製に近づき威嚇する。	(①) 羽によつて発話されて「 (②) 」と伝わっている。文になって (③) 。
②	スピーカーを二つにして一方からは「ピーツピ」、他方から「チチチ」と別々の声が流れるがタイミングは連続している。	モズのはく製を追い払わない。	二羽が別々に発話しても「 (②) 」とは伝わらない。文になっていない。
③	「チチチ・ピーツピ」を一つのスピーカーから流す。	モズのはく製を追い払わない。	一羽が (④) 発話しても意味は伝わらない。文になっていない。
④	二つのスピーカーから「チチチ」と「ピーツピ」を分けて流す。	モズのはく製を追い払わない。	二羽が別々に発話しても意味は伝わらない。文になっていない。

二 一次の《文章Ⅱ》は、歌人・俵万智の『生きる言葉』の一節です。これを読んで後の問いに答えなさい。

《文章Ⅱ》

言語学者の川添愛さんと対談した折に、^{〔注1〕} AIのことが話題となった。私は歌集『アボカドの種』のあとがきで次のように書いている。

「言葉から言葉をつむぐだけなら、たとえばAIにだってできるだろう。心から言葉をつむぐとき、歌は命を持つのだと感じる」。歌集のタイトルは、次の一首からとった。

1 言葉から言葉つむがずテーブルにアボカドの種芽吹くのを待つ

今は短歌を詠むAIも開発されていて、上の句を入れると、数秒で数百首を**出力**したりする。それはそれで、なかなか面白いのだけれど、結局は言葉から言葉をつむぐ作業だ。生きた人間である私たちが目指すのは、心から言葉をつむぐこと。AIが1から100を生むのを横目に、自分は0から1を生みたいと思う。

意外だったのは、川添さんが「AIの創作と人間の創作を切り分ける答えだと思う」として、『アボカドの種』から次の一首をあげてくれたことだ。

作品は副産物と思うまで詠むとは2 心掘り当てること

この歌が生まれた経緯^{〔注2〕}については「歌うに値する体験」で触れた。ホストのみんなの情熱に気おされるようにして生まれた一首だった。

川添さん曰く「AIは作品をいっぱい作るけど、人間にとって作品はあくまで副産物であり、心を掘り当てるのが創作の**3 醍醐味**なんだと教えていただいたて、すごくしっくりきました」。AIという文脈の中で鑑賞^{かんしょう}してもらい、一首が別の方向から光をあてられ、今までにない表情を見せてくれたように感じた。川添さんは、こうも言う。

「AIが書く小説がはやったら、人間の作家は職がなくなってしまうんじゃないかとよく言われますが、それは生産に焦点^{しやうてん}が当たっているから。作品を生み出すモノとして捉えたら、作家もAIも同じですよ。私は作品を書く**カティ**で自分の中を掘り下げて、嫌だったことや楽しかったことが作品の中に何となく出てくるところが面白いので、やはり書いている力^{ちから}イが楽しいんですね。作品は大事だけどあくまで副産物で、文章を書いたりすることで自分をよく知ることが一番の宝物、主産物なんだと、非常に腑に落ちました。どことなく人間をマシンとして見ているから、『AIに侵食^{しんしょく}される』みたいな論が出てくるのかなと思います」

そうなのだ。結果の優劣^{ゆうりゃつ}に意識がいきすぎると、見失うものがある。ご自身で小説も書かれる川添さんの言葉には説得力があった。もう一首、彼女があげてくれたのが歌集『プーさんの鼻』にある次の歌。

4 「かーかん」にいろんな意味のしっぱあり「かーかんやって」「かーかんちようだい」

「これは、一見、子どもからお母さんへの呼びかけでも、意図としては要求だったり、お願いだったりする、という歌ですよ。最初からそんなふうに、言葉に表面的じゃないいろんな意図を込めているのが、人間の言葉の本質なのかなと思いますね。隠れた意図を指す『意味のしっぱ』という表現がすごく面白い」

まことに言語学者らしい視点からの鑑賞だ。言葉には「意味」と「意図」があるという。「かーかん」の意味は「お母さん」だが、時と場合によって「お母さん、これやって」「お母さん、これちようだい」というような意図を持つ。表面的な意味だけでなく、背景にある意図を汲み取れるのが人間のコミュニケーションだ。もしAIに伝えようとするならば「やって」や「ちようだい」の部分を入力しなくてはならないだろう。

さて、ここまでのところ、AIと人間の違いを強調してきたが、決してAIを敵視しているわけでも、張り合おうと思っっているわけでもない。本質的な違いを認識したうえで、面白い**アイボウ**として付き合っていけたら、というのが私のスタンスだ。短歌の創作ということについても、AIを通して見えてくるものがある。

朝日新聞社メディア研究開発センターに浦川通さんという人がいて、短歌AIを開発している。文化部の佐々波幸子記者を通して彼からお声がけいただき、2022年に私はそのAIに触れる機会を得た。また、それまで^{〔注3〕} ウィキペディアなどで学習してきた短歌AIに、私の歌集を学習させて「万智さんAI」が誕生した。

一つの実験として興味深かったのは、同じ上の句を入力しても、それまでの短歌AIと万智さんAIとでは**出力**にかなり違いがあったことだ。そして万智さんAIのほうが、短歌としてまっとうというか味わいがあるように見えた。これを人間に置き換えると、いいものを読んだほうが、いいものを詠めるようになるということではないだろうか。やや**5 手前みそで恐縮**だが、ウィキペディアよりは私の歌集のほうが勉強になるということである（逆でなくて、よかった……）。

また、もし短歌AIと付き合うなら「壁打ち相手」としてそばに置くのがいいなと感じた。上の句だけができて、下の句が決まらない時や、一か所だけ言葉が埋まらず空白になっていることは、よくある。そんな時に、AIに頼めば**瞬時に無数の「ウホ**を出してくれる。もちろんそのまま採用するというのはなく、そうかそういう言葉もありかと、行き詰まった発想を刺激してもらえそうだ。

浦川さんの作ったAIは、発想の飛び具合を調節できるというスグレモノ。常識的な文言から、段階を経て想像を超える発想（言葉と言葉の意味合いの距離が遠いもの）まで、リクエストが可能だ。

初めてAIを使わせてもらった時に、上の句だけで、ずっと止まっていた歌があった。「一人称あまり使わぬ日本語に」というものだ。英語なら必ず「I」と言うところ、日本語はたいてい省略してしまう。ただ、それはよく知られたことなので、下の句で普通に受けてもつまらない。どう**テンカイ**

すればいいか探せずにいた。

そこで、万智さんAIである。ズラツと出てきた下の句に、なかなかいいのがあった。ちなみに、よしあしの判断はAIにはできない。これにはホツとさせられる。あまたの候補から見どころのあるものを選ぶのは、人間の感性なのだ。

一人称あまり使わぬ日本語に君の心を隠しているか

これがピックアップしたAIによる下の句だ。どうです、悪くないでしょう？ 一人称を用いないというのは、自分の心を隠したいという潜在意識があるのではという問いかけになっている。

短歌AIについては、浦川通著『AIは短歌をどう詠むか』に詳しいので、興味のある人は、ぜひ手に取ってほしい。万智さんAIと、その後さらに永田和宏さんの短歌を学習した永田さんAIも登場している。

また2024年4月には、木下龍也さんの『あなたのための短歌集』を学習した木下さんAIを用いたイベントが行われた。仕掛け人は浦川さんと佐々波さんである。オンラインで私も視聴したのだが、6 ちよつとびつくりするほどAIのデキがよくなっていた。『あなたのための短歌集』は、短歌を注文する人の依頼文と、それに応えて木下さんが詠んだ短歌がセットになっている歌集だ。依頼文ごと学習しているからだろうか、イベントで紹介されたAIの短歌は、どれも結構なレベルだった。もちろん、無数の出力作品からセレクトした浦川さんの眼力によるところも大きいだろう。さらに、この時のAIは、これまでと違って対話型の「注4」チャットGPTベースにしたそうで（ファインチューニング）、その影響も考えられる。『あなたのための短歌集』は、まさに依頼人と木下さんの対話のような本だから、相性が良かったのかもしれない。

たとえば最初に紹介された依頼は次のようなものだった。

「結婚しないこと、子供を産まないこと。多様な生き方が認められる時代といえど、私の年代では『しないこと』の理由は、やはり問われます。その重圧に自分も耐えられなくなるときがあります。自由な生き方に対して歌をお願いします。（千葉県・40代）」

これに応えて木下さんが詠んだ一首。

心配をありがとうでも帆をたたむ港がみんなとは違うだけ

なんだかんだプレッシャーをかけてくる人というのは、うつとうしいけれど心配してくれている人でもある。まずは「ありがとう」とその気持ちを受けとめつつ、自分のたどりついた場所を否定しない下の句が優しい。「み

んな／とは違う」の「注5」句またがり効いていて、「とは」にクツと力が入るのもいい。私は私にふさわしい港に帆をたたんだだけですよ、と穏やかに着地している。

対する木下さんAIは次のように詠んだ。

揺れるとは美しいことの証明で花びらでも花は群れないのです

依頼人の揺れ動く心を、まずは思いきり肯定してくれている。それは美しいことの証明なのだ、と。理由は書かれていないが、感覚的にはわかる。そしてたとえば、同様に美しく揺れる花びらは、たまたま同じ花を形成してはいるけれど群れているわけではない。そう、花びらだって、結局は1枚1枚なんだから、

……。

なんと優しいAI！と思わず拍手しそうになった。だが、今綴った鑑賞は、私がこの歌に参加して完成させた部分だ。そもそのAIにこのような意図があったかどうかは確かめようがない。いや、たぶん意図などというものはなくて、あるのは出力された意味だけだ。それなのに、こんなにグツときてしまう自分が、7 ちよつと怖かった。

ちなみに、結婚や出産ということに関しては、私自身も少数派の道のりを歩いてきた（結婚はしない、子どもは産む）。で、こんな歌を詠んだことがある。

恋、結婚、子育て、運転、引越しの「する」は「しない」よりも偶然

「しない側」から見ると、している人たちには何かしらの8（ ）然性があった、そうしているように見えがちだ。だが、いくつか「する側」になってみると、意外とそれは偶然で、むしろしないほうが強い意志があつてのことなのだと感じる。だから依頼人の40代の女性には「あなたは意志の強い人なんじゃないかな。偶然に流されず、しっかり考えてきたから、今の人生があるんだと思う！」と言ってさしあげたい。

【注】

1 AI……人工知能。

2 「歌うに値する体験」……『生きる言葉』の、これより前の章段のタイトル。

新宿歌舞伎町のホストたちの歌会についての話題が書かれている。

ている。

3 ウィキペディア……インターネット上で自由に使える百科事典。

4 チャットGPT……対話型のAI（人工知能）の一種。

5 句またがり……短歌で、一つの語が二つの句の切れ目をまたぐもの。

問一 本文中の太字の**カタカナ**は漢字に直し、**漢字**は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 言葉から言葉つむがずとありますが、ここで筆者の言う「言葉から言葉つむぐ」とはどのようなことのとえですか。次のア～エの中からもっともよくあてはまるものを一つ選び記号で答えなさい。

ア 生きた人間である私たちが、自分の心の中から言葉を生み出してつなげていくこと。

イ 生きた人間である私たちが、便利なAIを用いて面白い句を作り命を吹き込むこと。

ウ 短歌を詠むAIが、上の句を入れるとたったの数秒で数百首を作ってしまうこと。

エ 短歌を詠むAIが、1の言葉から100の言葉を順不同に生み出してくれること。

問三 2 心掘り当てることとありますが、具体的に説明している二十一字の表現を本文中から探し、ぬき出して答えなさい。

問四 3 醍醐味の意味としてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 難しさ イ 面白さ ウ 新しさ エ 複雑さ

問五 4 「かーかん」にいろんな意味のしつぽありとありますが、これはどのようなことを言っていますか。次のア～エの中からもっともよくあてはまるものを一つ選び記号で答えなさい。

ア 子どもは「かーかん」という意味の言葉に「やって」や「ちようだい」という自分の意図をしつぽのようにつなげた文で呼びかけてくるということ。

イ 子どもは「かーかん」という意味の言葉しか言っていないのに、お母さんが子供の表情や行動からその意図を先回りして察知するということ。

ウ 子どもは「かーかん」という意味の言葉しか言っていないのに、その中にはお母さんへの要求やお願いなどの意図が込められているということ。

エ 幼くて「かーかん」と「やって」や「ちようだい」を適切につなげることができない子どもでも伝えたい意図があれば母親には伝わるということ。

問六 5 手前みそと同じような意味の四字熟語としてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 意味深長 イ 我田引水 ウ 自問自答 エ 自画自賛

問七 6 ちよつとびつくりするほどAIのデキがよくなっていたとありますが、どうしてこのように言っているのですか。あてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 木下さんの『あなたのための短歌集』の作品をすべて学習した「木下さんAI」によって作られた作品だから。

イ 依頼人と木下さんがしっかりと対話を重ねて依頼人の揺れ動く心を肯定して作られている作品だから。

ウ このAIが学習した短歌集は依頼文と短歌がセットになっているため作品の背景も併せて学習したから。

エ これまでのAIとは違ってこのAIは対話型のチャットGPTベースに仕様が変更されていたから。

問八 に入れるのにもっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア たまたま揺れることがあっても大丈夫だよ イ 人もそれぞれでいいし、群れていなくても心配ないよ

ウ 群れていなくても、花びらはもともと美しいんだよ エ うつとうしい人も心配してくれているんだよ

問九 7 ちよつと怖かったとありますが、なぜそう言っているのですか。その理由としてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア AIが人間より進んでおり実はすでに人間を超えているのかもしれないから。

イ AIは機械なのに人の気持ちを肯定してくれるなど優しい気持ちを表すから。

ウ AIは意味しか出力していないのに、ぴたりする意図をくみ取ってしまえるから。

エ AIが人を感動させる意味を出力させることが不気味だったから。

問十 8 () 然性 () に入る漢字一字を本文の内容に合うように考えて書きなさい。

三 英子さん・和美さん・楓華さんは、各自で《文章Ⅰ》と《文章Ⅱ》を読みました。そのあと、先生も交えて感想を述べあつて会話をしています。これを読んで後の問いに答えなさい。

英子さん ≪文章Ⅰ≫と≪文章Ⅱ≫の本のタイトルは、どちらも「言葉」という語を含んでいるね。

和美さん ∴話題の中心は《文章Ⅰ》が人間の言葉と動物の言葉、《文章Ⅱ》が人間の言葉とAIの言葉で、それぞれの比較や特徴、新しい発見などがある、おもしろいね。

先生
どんな共通点に興味を持ったかな。

楓華さん ..はい、私は『言葉』を持つのは人間だけだ』という考えに対して、動物やAIも人間と同じように「意味」を組み合わせて言葉を使っている、という点に着目しました。

英子さん ・・楓華さんが言った「意味」ということかというと、私は《文章Ⅱ》の『かーかん』にいろんな意味のしっぽあり『かーかんやつて』『かーかんちようだい』の歌の説明のところにある「表面的な意味だけでなく、背景にある意図を汲み取れるのが人間のコミュニケーションだ」というところに関心を持ちました。

和美さん…「かーかん」の意味は「お母さん」だけど、「お母さん、これやって」「お母さん、これちようだい」という意図が、人間のコミュニケーションにはあるってことだね。私の所属しているバスケットボール部では、プレー中に「ボール！」とか「楓華！」とか短い言葉を言うんだけど、これは意味で、その意図は「英子、ボールをこっちに回して！」とか「楓華、パス受け取って！」って、英子や楓華に動いてもらうことなんだよね。

先生

『文章Ⅰ』のシジュウカラには、それと似たようなことがないかな。

楓華さん シジユウカラの「ピーツピ・ヂヂヂヂ」は「警戒して、集まれ」という意味だ、と筆者の鈴木俊貴さんは言っているけれど、それによって仲間たちに天敵を追い払うための行動を促そうとする意図が、ちゃんとあるように思います。

先生

シジュウカラも人間と同じようにコミュニケーションをしている、と言えそうだね。AIの方はどうだろう。

英子さん 《文章Ⅱ》の前半で筆者の俵万智さんは、「背景にある意図」を汲み取れるのが人間のコミュニケーション」であるのに対して、
 というようなことを言っているね。

和美さんでも後半では、「木下さんAⅠ」が詠んだ「揺れるとは美しいことの証明で花びらでも花は群れないのです」から、AⅠが歌の依頼人を肯定しようとしているように感じ取ったり、「なんと優しいAⅠ!」なんてことまで言っているよ。

英子さん：AIの言葉からも、人間に対する意図のようなものを感じ取っている。

楓華さん…私たちが普段、言葉の表面的な意味だけでなく背景にある意図を汲み取ってコミュニケーションをしているのと同じように、動物もA

Iもその能力を持っているのかもしれない。

先生
 .. AIのほうはまだはつきりわからないけれど、でもいずれAIも意図や意志を持って人間とコミュニケーションをするようになるかもしれないね。みんなはどう思うかな。

問一

に入れるのにもっともふさわしいものを次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。

AIは1の意図から100の意図を読み取ってくれるが、人間はもっと多くの意図を読み取ることができる

イ AIは1の意味から1000の意味を生み出すだけで、意図の部分は人間が入力しなければならない

ウ AIも人間も1から100の意味を生み出せるが、0から1の意味を生み出すことができない

工 AIも人間も1から1000の意図を生み出せるが、0から1の意図を生み出すことができない

問二 私たちが普段、言葉の表面的な意味だけでなく背景にある意図を汲み取ってコミュニケーションをしているとありますが、「言葉の表面的な意味」と、そこから「意図を汲み取る」ようなコミュニケーションの具体的な例を一つ挙げて書きなさい。あなたの経験の中でのもので出来事や、あるいは自分でも考えた例でもかまいません。答えは左の解答らんに書きなさい。